

第31回デンソーカップチャレンジサッカー 刈谷大会 ～九州選抜チーム監督として～

青木 竜*

1. 期日

平成29年2月17日（金）～19日（日）

2. 場所

愛知県刈谷市 / 刈谷総合運動公園

3. 大会概要

公益財団法人日本サッカー協会および一般社団法人全日本大学サッカー連盟が主催となり、全国各地域から選抜された選手による大学サッカーの強化育成とユニバーシアード大会に向けた全日本大学選抜チームの選手選考を兼ねた大会である。大学サッカーにおける国内最高レベルの大会といえ、プロ選手への登竜門として位置づけられている。

4. 参加チーム

全日本大学選抜、北海道・東北選抜、
関東選抜A、関東選抜B・北信越選抜、
東海選抜、関西選抜、中国・四国選抜、
九州選抜

5. 参加者

《監督》青木 竜（鹿屋体育大学）
《コーチ》川部靖徳（東海大学熊本）、
桑原一太（九州保健福祉大学）
《トレーナー》甲斐龍人（九州保健福祉大学3年）
《主務》毛塚峰羽（鹿屋体育大学2年）
《選手20名》
GK 加藤大喜（九州産業大学3年）
DF 宮本敏広（九州共立大学3年）
DF 奥田雄大（鹿屋体育大学2年）

DF 西村大吾（日本文理大学3年）
DF 三浦秀也（福岡大学3年）
MF 長谷川雄志（宮崎産業経営大学3年）
FW 片井 巧（鹿屋体育大学3年）
MF 佐々木亜門（福岡大学3年）
FW 北村知也（宮崎産業経営大学2年）
FW 児玉怜音（日本文理大学3年）
GK 末次敦貴（東海大学熊本2年）
DF 福森健太（鹿屋体育大学3年）
MF 末永 巧（九州産業大学2年）
DF 綿引 康（鹿屋体育大学2年）
MF 樋口雄太（鹿屋体育大学3年）
MF 横道恭輔（九州共立大学3年）
MF 今村一希（福岡大学2年）
DF 奥村泰地（鹿屋体育大学2年）
FW 儀保幸英（沖縄国際大学2年）
MF 赤木 翼（九州産業大学2年）

6. 大会日程および結果

2/17（金）《1回戦》

全日本 4-0 九州
関東B・北信越 0（4PK1）0 北海道・東北
関東A 5-1 中国・四国
東海 0-3 関西

2/18（土）

《2回戦》全日本 10-2 関東B・北信越、
関東A 3-1 関西
《順位決定戦》九州 1（4PK3）1 北海道・東北、
中国・四国 4-0 東海

2/19（日）

《7、8位決定戦》北海道・東北 1-2 東海
《5、6位決定戦》九州 3-2 中国・四国

* 鹿屋体育大学 スポーツ・武道実践科学系

《3位決定戦》関東B・北信越 1-2 関西

《決勝》全日本 1-2 関東A

7. 九州選抜3試合の振り返り

初戦は開幕戦と位置付けられ、大会関係者や他チームの選手たちが観戦する中で行われた。Jリーグチームの多くのスカウトがこの大会で活躍した選手をピックアップすることを選手たちにも伝え、格上のチームである全日本選抜に対し、どれくらい通用するかを試す絶好の機会であることも話し、ピッチに送り出した。前半は立ち上がりから浮立立つことなく攻守ともに奮闘し、失点を1で抑えたが、後半はボールを支配され、守備に回る時間帯が多くなり、結果的に3失点と苦しい試合展開で試合を終えた。公式記録でのシュート数は、九州4本、全日本20本と圧倒された結果になった。8月にユニバーシアード本大会を控えた選手たちは、スピード感に差はみられないものの、プレーの精度に圧倒的な差があったように感じた。日本プロサッカーリーグJ1で活躍するであろうプロ予備軍との決定的な違いは、体格やパワー、状況判断でもなく、プレーの精度であることが確認できた。このことは今後の指導の糧を得られたという意味からすると有意なものである。



初戦に敗れたことで、2日目は5～8位決定戦に回った。北海道・東北選抜は昨年の開幕戦で全日本選抜に勝利したチームである。試合開始から押し気味に試合を進めるも、31分の片井のゴール後、相手の守備を崩しきれず追加点が奪えない状

況であった。後半59分に同点にされたが、押し気味の試合展開は変わらず、攻撃の時間はとても多かったように感じる。シュート数は九州14本、北海道・東北7本であった。90分では決着がつかずPK戦に突入。GK加藤がPKを2本止めるなどの活躍もあり、4-3で勝利した。

最終日の5、6位決定戦は、メンバーを大幅に入れ替えて挑んだ。このことは、大会を通じて多くの選手にチャンスを与える意味でも、大会の意義を考慮する意味でも重要であると考えての決断であった。試合開始から伸び伸びとプレーする選手たちであったが、ゴール前までボールを運ぶことができず攻守が目まぐるしく変わる展開となった。前半7分に失点したものの、17分に儀保が個人技を生かしたプレーから同点ゴールを決め、52分に樋口の逆転ゴール、68分に福森の3点目が決まり2点差とした。その後、失点するも初出場の選手たちが球際で奮闘したことも大きく作用し、勝利で大会を終えることができた。

初戦に敗れたことで、最高位は5位ということが確定した。負けはしたものの、結果的に全日本選抜との対戦において、選手たちは注目を浴びることができ、スピード感やプレーの精度の差を体感した選手たちは、2日目以降の試合において明らかにゆとりを持ってプレーしていたように感じた。

8. まとめ

他の地域でも同様であると思うが、九州においても福岡から沖縄までの選手を招集し、大会に向けての強化試合や強化練習等を複数回行うことは困難である。限られた時間の中で、サッカーでの方向性や課題解決は当然のことながら、重要視すべきことは、大会までに選手間の心の距離を近づけることではないかと感じ、他のスタッフとともにアプローチを行った。5位で大会を終えたことに満足はしていないが、大会を通じて勝ちながら成長することの大切さを学ぶことができ、大変有意な経験ができたと感じた。

大会期間中、刈谷市の少年を対象にサッカークリニックが開催され、多くの子どもたちと触れ合えたことも素晴らしい経験となった。



また、愛知県立豊田特別支援学校サッカー部の皆さんとのサッカー交流会も開催され、本大会がサッカーを通じてスポーツの普及推進に寄与するための活動を積極的に行っていることも併せて報告する。

